

研究・調査報告書

分類番号		報告書番号	
A-151		17-044	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門 三浦克之
題名（原題／訳）			
Moderate alcohol consumption as risk factor for adverse brain outcomes and cognitive decline: longitudinal cohort study. 脳への有害作用・認知機能低下の危険因子としての中量飲酒：縦断コホート研究			
執筆者			
Topiwala A, Allan CL, Valkanova V, et al.			
掲載誌			
BMJ. 2017 Jun 6;357:j2353. doi: 10.1136/bmj.j2353.			
キーワード			PMID
飲酒、認知機能、脳萎縮			28588063
要 旨			
目的： 中量飲酒が脳構造・機能に対する有益・有害な関連があるか、もしくは特定の関連が無いかを調査する。			
方法： 1 週間の飲酒量と認知機能を 30 年間の追跡中（1985-2015 年）に反復測定したイギリスの Whitehall II コホート研究。同コホート参加者の中から無作為抽出し、終了時（2012-2015 年）に MRI 検査を行ったサブコホートの一般成人男女 550 人（ベースライン時の平均年齢 43 歳、標準偏差 5.4 歳、CAGE スクリーニングによるアルコール依存者と疑われる者なし）を本研究の対象とした。脳構造の測定項目は、海馬の萎縮、灰白質の密度、白質の微細構造とした。脳機能として、研究期間における認知機能低下度、画像検査時の横断的認知機能を測定した。			
結果： 30 年間の追跡で飲酒量は量依存的に海馬の萎縮オッズ増加と関連していた。週 30 単位（1 単位＝純アルコール換算 8 グラム）以上の飲酒者は非飲酒者比べて最もリスクが高く（OR5.8, 95%CI 1.8-18.6）、中等度飲酒者（14-21 単位/週）においてさえも右側海馬萎縮のオッズが非飲酒者に比べて 3 倍であった（OR3.4, 95%CI 1.4-8.1）。少量飲酒（1-7 単位）群において非飲酒群と比較した“保護的効果”は認めなかった。飲酒量は脳梁の微細構造・語彙流暢の早期増悪と関連していた。横断的な認知機能、縦断的な意味流暢性変化、語想起との関連は無かった。			
結論： 飲酒は中等度であっても脳の構造的・機能的に望ましくない結果（海馬の萎縮を含む）と関連していた。この結果は飲酒を減らすイギリスの指針を支持し、アメリカの現在の推奨上限に疑問を投げかけるものである。			